

2022年度 入学試験問題
(仙台・東京・東海・高松会場)

国 語

(60分)

〔注意〕

-
- ① 問題は㊦～㊨まであります。
 - ② 解答用紙はこの問題用紙の間にはさんであります。
 - ③ 解答用紙には受験番号、氏名を必ず記入すること。
 - ④ 各問題とも解答は解答用紙の所定のところへ記入すること。
 - ⑤ 各問題とも特に指定のない限り、句読点、記号なども一字に数えること。
-

西大和学園高等学校

問題は次のページから始まります。

次の文章は、奈良県立大学が二〇一九年に発行した冊子の冒頭に収められた文章である。その冊子では、奈良県立大学の学生が奈良の見どころを伝えるという特集が組まれている。これを読んで、あとの問いに答えよ。

平成最後の正月あたりから、奈良イメージの「解凍」に取り組みだした。解凍だから、破壊しようと企んでいるわけではない。改善を狙いとしたものでもない。まして新たに創造しようなどと、大それたことは考えていない。(A)「柿食えば・鹿・大仏さま・大鳥居」的に、がちがちにフリーズした感のある奈良のイメージに、もう一度温かい血を通して、蕩かしてみようと思ったのだ。地方の時代ともて囃されてあるいは突き放されて―ずいぶん時が経つが、いまだ自立はおろか、降りかかる火の粉も自分で払えない。地方が抱える課題は、そもそも国家や中央政府の案件ではない。マクロな存在にミクロの悩みなど伝わるはずもないのだ。ミクロはミクロ同士、地方の歴史と風土にツチカわれた多様な「知」を、お互いに融通しあうのが「地方の問題」解決の適正かつ早道の手段ではないか。

この実に「まっとうな」―と思われる―考え方に立ち塞がるのが、「知」の品質保証の問題である。地域アイデンティティ認識の問題と言い換えてもよい。他の地は知らず、奈良は歴史的に―地勢的にも―「大きな物語」を持っている。今、あらためて奈良の「知」の本質は何であるか、その「ゲンセン」をどこに求めるべきかを自分自身の内部に探ってみても、大昔につくられた、たった一つの―しかも、手に余るほどの―大きな物語しか見当たらない。奈良の弱点は、「日本最初の首都」にまつわるコンテンツ（ヒト・モノ・コト）以上のものが―少なくとも目立つかたちでは―つくられてこなかったところにある。「頭突き」しか技のないプロ・レスラーが、場面や相手に見境なく、天性の恵まれた石頭を遮二無二ぶつけていくように、奈良は、いつでも・どこでも・だれにでも、あるときは胸を張って、別の時には含羞みながら「日本人のふるさと」まほろば」と―呪文のように―唱えてきたのである。

その呪文が、個々の「期待」を胸に奈良を訪れる―あるいは一時的・短期的に居住する―他者に作用すると、観察や思考に先立つ奈良イメージ形成の所与となった。奈良に対する他者の―本来は多岐多用であったはずの―期待は、「奈良」まほろば」の磁場に絡め取られてモノトーン化し、各々の「期待」の部分だけが―正と負の両方向に―デフォルメされて、しかもうんざりするほど大量にかつ繰り返されて、奈良のものには自尊と羞恥を―極端なカタチで―かきたたせる「奈良イメージ」として、固着していったのである。自分（奈良）とは何者かの答えを内部に見いだせないものは、そのような「他者の表現物」で、ダイタイするしかない。「奈良」まほろば」の呪文は、絡め取った他者を経由して再び奈良に回収され、(B) 奈良の「アイデンティティ」を侵蝕し、奈良に取り憑いたのである。その結果、アイデンティティに根ざす奈良の「知」の本来まで、見えにくくしてしまった。

「まほろば」とは「真秀場」とも「真秀等間」とも書かれ、「素晴らしき土地」を意味する。(C)、首都と素晴らしきはイコールしないが、少なくとも「まほろば」の一般的感覚は「首都」と結びついている。「まほろば」は、日本最初の首都・奈良に相応しい「美称」とも言えるが、しかし奈良が首都であった時期は、飛鳥時代を含めても120年足らずしかない。奈良が首都(宮処)となる以前はさておき、それ以後だけでも1500年を超える奈良の歴史的時間の中で、「奈良まほろば」の時代は、10%にも満たないものである。8世紀の終わりに、咲く花の匂うが如き「都/宮処」が消滅し、その1300年後に忽然と今日の奈良が出現したわけではない。1000年もの長きにわたって、奈良は「地方」の一都市として維持され続けてきたのだ。さればこそ、飛鳥・奈良時代の文物・さらに、正倉院宝物に見られる漆器や筆管の技術までもが現存しているのである。こういう都市は他にあるだろうか。奈良の「知」の本質は、内外の最新テクノロジーを結集して形成された「まほろば」時代の奈良のコンテンツ「主語」ではなく、それらをほとんどそのままの状態で維持・継承・活用している、言い換えれば奈良のコンテンツをコンテンツたらしめている、その方法「述語」——にこそあるのではないか。

これまでの奈良のイメージは——分り難い喩えになるが——モーターショーに出品されるプロトタイプ・カーのようなものだ。理想的ではあっても、このままでは公道を走れない。「夢の車」を諸々の規格や規準に適合した市販車とするには、不具合な部品を入れ替え、不足するパーツを補い、余分なものは取り除いていくプロセスが必要だ。奈良のイメージも——コンテンツをいじくるのではなく——構成する諸要素や形成のプロセスを——リバース・エンジニアリング的に——分解・解析し、組み立て直すことができれば、Xの奈良プロトタイプからYの奈良アイデンティティに転位するのではないか。他地域にも融通でき、実践的に適用可能な——普遍性を有する——奈良の「知」とは、そのような奈良の——アイデンティティに基礎を置くものであるはずだ。

奈良のヒト・モノ・コトが創り出す「知」を必要としているのは、奈良のものや奈良ファンと呼ばれる、すでに奈良にどっぷり浸っている人たちではない。(D) 奈良の「外側」において、まなざしを奈良に向ける余裕もない人たちである。しかし、著名な書籍やデジタルに描かれてきた奈良は、自分は愛するものだけを見て、讚美するものだけに心を開いている。あるいは逆に、厭う言葉に背を向け、貶す声に耳を塞いでいる。どちらの奈良も「今日の世界」に全く関心がないかのように、日本の中心で凝つとしている。

本来の奈良には、この時代の動きがどのように映るのか。どんな知識や実践を社会に提示できるのか。奈良がフリーズして動かないのなら、われわれの方から奈良の解凍に動きだすしかない。これが、冒頭に述べた「奈良のイメージを解凍する」の本意である。

従来語られてきた奈良のコンテンツの「述語を換える」には、大別すると2つの方法がある。一つは、超有名な「奈良本」の語り口を、その陰にカクれたややマイナーな「奈良本」の述語に入れ替えるやり方で、これは本年2月に開催した「奈良のイメージを解凍

する。」という、気持ちをもそのままタイトルにしたシンポジウムで行った。

もう一つは、語り手を「そっくり」変えてしまう方法である。本特集は、これを実践したものだ。語り手は、博識な評論家でも学者でもない。表現のプロである小説家でもなければ、写真家でもない。公立大学法人奈良県立大学地域創造学部の学生、39名である。全編を掲載するには紙幅が足りない。やむなく39のレポート^{すべて}全てから、部分的に^eバツスイ・引用し、編集させていただくことにした。学生諸氏はまた、5冊の奈良関連本を読み（「五読／ごどく」、県内5カ所にも足を運んでいる（「五訪／ごほう」）。

本稿には『古寺巡礼』や『大和古寺風物誌』などに描かれた事物・文物と――当然ながら――重なるところも多いが、その視点や関心の傾きは、全く異なっている。あるいは、そのアングルに「これが奈良か」と訝^{いぶか}しく思う向きもあるだろう。そこで予めこうお答えしておいた。

3

「奈良ですけど。」

（中島敬介の文章による。『EURO-NARASIAQ vol.14』所収。一部改変）

【語注】

（注1）デフォルメ

： 物事を変形させて、原型のある部分を誇張したり簡素化したりすること。

（注2）プロトタイプ・カー

： 新技術を試験的に取り入れた自動車。市販はされない。

（注3）リバース・エンジニアリング

： 工業製品の分解等を行うことで、その製品の仕組みを調べること。

（注4）『古寺巡礼』や『大和古寺風物誌』

： 『古寺巡礼』は一九一九年に出版された和辻哲郎の著作。また、『大和古寺風物誌』

は一九四三年に出版された亀井勝一郎の著作。いずれも奈良を題材とした書籍であり、名著とされている。

問一 二重傍線部 a～e のカタカナを、それぞれ漢字に直せ（楷書で、丁寧に書くこと）。

問二 空欄（A）～（D）に入る語として最も適当なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じ記号を二度以上用いてはならない。

ア かえつて イ ただ ウ まさに エ むしろ オ もちろん

問三 傍線部1「柿食べば」とあるが、これは奈良にまつわる有名な俳句の一節である。I・それはどのような俳句か、十八文字の平

仮名で答えよ。また、II・その作者名を次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 高浜虚子 イ 中村草田男 ウ 正岡子規 エ 松尾芭蕉 オ 与謝蕪村

問四 傍線部2「大きな物語」とあるが、それはここではどのようなことだと考えられるか。その説明として最も適当なものを次の中

から一つ選び、記号で答えよ。

ア 奈良とは、日本中の誰もが知っている土地であり、歴史において重要な場所だと考えられるため、そこでは壮大な歴史のストーリーが今も語りつがれていると人々に思われているということ。

イ 奈良とは、日本で最初の首都となった土地であり、日本の歴史や文化はこの場所から始まったのだと考えられるため、日本人の心のふるさつであるかのように人々に思われているということ。

ウ 奈良とは、日本の長い歴史の中でわずかな期間のみ首都として機能した土地であり、他の都市に比べて地味な印象だと考えられるため、魅力に乏しい都市だと人々に思われているということ。

エ 奈良とは、日本文化が始まったとされる土地であり、今もその当時の文化を守っている場所であると考えられるため、古いイメージにとらわれている都市だと人々に思われているということ。

オ 奈良とは、「まほろば」とも呼ばれることのある素晴らしい土地であり、だからこそかつては日本の首都にもなったと考えられるため、有名な観光地なのだとは人々に思われているということ。

問五 空欄 ・ に入る語の組み合わせとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア X・一様 | Y・多様

イ X・過去 | Y・未来

ウ X・虚偽 | Y・真実

エ X・消極 | Y・積極

オ X・理想 | Y・現実

問六 傍線部3「『奈良ですけど。』」とあるが、どういうことか。六十字以内で説明せよ。

問七 波線部「奈良イメージの『解凍』」とあるが、どういうことか。本文全体をふまえて、百字以内で説明せよ。

次の文章はミュージシャンとしても活躍する筆者によるエッセイである。これを読んで、あとの問いに答えよ。

「もうほとんどの夢が叶った」と言われた。

後に引けず、先が見えず、バンドを続けていくことが辛くてたまらない時期に互いを杖にして進んでいた。

一緒に売りたい、そう信じていちばん長い時間を過ごした元バンドマンの友人がいる。彼がバンドを辞めたあの日から、その杖をへし折ってここまで来たと思っていた。新大阪駅構内の居酒屋で、ひさびさに酒を飲みながら昔話をしている時、「もうほとんどの夢が叶った」と言われて驚いた。もちろん、今では自分の会社を立ち上げて新しい目標を手に入れた彼自身の活動ではなく、こっちの活動を指しての言葉だ。同じくらい憧れて同じくらい苦しんだのに、ある日とぜん別れて裏切った。そう思っていたのは自分だけだったのかもしれない。杖をへし折ったあの日から、やけにかたむいた不細工な歩き方でここまで来た。自分だけ目標に近づいていることが心細くて申し訳なくて、いつも落ち着かなかった。

でも、「もうほとんどの夢が叶った」という言葉に、その不細工な歩き方を褒められたようで、嬉しかった。

夏は花火になる。毎週末、各地で開催される野外フェスで、決められた時間内で打ち上がっては切なく汗をかいている。多ければ日に3組以上、それぞれの人気や実力が浮き彫りになる。大小様々なステージで同じ時間帯にライブが行われるせいで、ターマインから地味な蛇玉まで、ステージのランクや見物人の数はリアルに現実を突きつける。

熱狂を終えればすぐに乾く。綿密に組まれたタイムテーブルに沿って次から次へと出てくるバンドが上書きしていく、観客のまぶたの裏にちらつく点滅は、思い出と呼ぶにはあまりにも頼りない。

だからこそ、燃える。どれも均等で一定の結果が出るのならば、やるほうも見るほうもすぐに飽きるだろう。振り落とされないように、勝ち残るために、どの出演者も必死に食らいつく。

予定時刻ちょうど、歓声を合図にしてステージ袖から歩きだせば、突きあげた無数の拳で大勢の観客が迎え入れる。何万人をも収容する広大な敷地を埋め尽くすのは、人と人と人だ。そのなかにできた無人のスキマを探してしまうのは、いつまでも直らないクセだ。決してテレビカメラが映さない場所にこそ、正しい現実がある。だからまず、埋めきれない悔しくて恥ずかしい場所を見つけてしまふ。手をあげている人を見つければ手をあげていない人を探してしまうし、飛び跳ねている人を見つければ飛び跳ねていない人を探してしまう。音楽を、自分を、信じれば信じるほど、足りない部分が気になる。客がいなせいでこんなにスキマが空いてるのに、あ

んなにうまそうに食ってるよ、と思われたくない。だから弁当のフタを開けても、ハンバーグやエビフライを無視して、スミにある漬物に箸を伸ばす。目を泳がせて、まず恥をつまんで、その客入り相応の態度をとってしまおう。

常に騒がしいロックフェスでは、とりわけ無音に近い音ほどよく聞こえる。そのせいも、ステージ中央でマイクの前に立てば観客が息をのむ音を聞くことができる。目がくらむほどの視線を集めて、バンドマンなら誰もが夢見るこの瞬間、²ここでいつも迷ってしまう。第一声、観客に向けてなんて言っているのかがわからないからだ。地鳴りのような歓声を手に入れるためには、それなりの「煽り」が必要になる。

こんな時、今いちばんスタンダードな第一声が「いけるか」の後に地名を添えて絶叫するプランで、勝手にへいけるか！ ご当地パックと呼んでいる。土地に呼びかけるといふ滑稽さを除けば、ちょうどいい熱量を含みつつ無難に地元の人々の心をつかむことができ、なんともお手軽で初心者向けだ。

そして「かかってこい」や「踊れ」など、一見インパクトがあつて強そうな言葉でもよく考えてみると中身の無い言葉の後に、これまた地名を添えて絶叫する第一声も主流だ。これは、〈外カリツカリ、中身ふわふわ！ ご当地パック〉と呼んでいる。これらを使わずにライブを進めるのは難しい。ロックフェスでライブが盛りあがっていないバンドは恥ずかしい。後で、トイレの個室に入っていたのがバレた男子小学生のような扱いを受ける恐れがある。

ライブ中盤あたりに盛り込まれる（注4）コールアンドレスポンスも悩みの種だ。あれっ、どうやるんだったかな。とりあえず、前の人を見てなんとかしよう。と、^Cお通夜でお焼香の列に並ぶ心境とよく似た焦りを感じる。それは、返してもらう以前に、差し出すものがないからだ。

当たり前前よりりの大切さはわかっているけれど、むやみやたらに返却を求めるのはおかしい。思わず「TSUTAYAか！」と突っ込みたくなってしまう。そのくせ、誰よりも延滞にはうるさい。差し出さなければ返ってくるはずがないのに、期待だけはしてしまふ。こんな考えでいたら、あつという間に旧作になってしまう。

ライブは絶妙なバランスで成り立っている。バンド側が限られた時間内での楽しみを考へると同じく、観客も限られた時間内でのいかに良いところをひき出すかを考へているんじゃないか。「お前たちも主役だぞ、お前たちと一緒に作っていくライブだからな」という胡散くさいMC通り、^aコールアンドレスポンスが X になる瞬間がある。そんな時、「踊れ」と言っているこちら側が踊らされているのかもしれない。

たまにテレビで目にする、新人歌手発掘を目的としたオーディション番組だつてそう。歌い終え、緊張の面持ちをした未来のスター

候補に対する審査員のコメントはどれも 辛辣だ。それを受けたスター候補は目を潤ませ、唇を噛んで、投げられた一語一句にすぎるような角度で頷く。それに気持ち良くなってすっかり盛りあがった審査員は、挙げ句の果てに「お前、歌を歌おうとするなよ、だから駄目なんだ」と訳のわからないことまで口走る。この時点でもう送り手と受け手の立場は逆転していて、どっちが表現者でどっちが審査員なのかわからなくなっている。歌手のオーディションで「歌を歌うな」と言うのは、未来のカビキラー候補に「お前カビを取ろうとするなよ、だから駄目なんだ」と言っているのと一緒だ。未来のカビキラー候補が、カビを取らずにカビキラーになるのは不可能だろう。

多くの人にとって、学校や職場と違い、ライブ会場は非日常だ。でも、出演者にとってはライブ会場が職場であり日常になる。その食い違いを埋めるため「煽り」や「コールアンドレスポンス」に挑戦しては、変な自意識のせいで失敗してきた（挑戦したことあるんだ……）。

もしこの嘘がバレていたらと怖くなって、自分で先にバラしてしまう。D 取調室でカツ丼が出てくる前に自白してしまうのは、刑事にも蕎麦屋にもなんだか申し訳ない。

気持ちの悪いことを言うと、ずっと音楽とつながっている。音楽で飯を食っているのではなく、音楽と飯を食っている。擬人化した音楽と食卓で向かい合うと、「クチャクチャうるせえ」と音楽の咀嚼音が気に障る。この先もずっと離れられないとわかっているからこそ、そんなささいなクセが気になってしまう。音楽と飯を食うというのはそういうことだ。「ちょっとそこの醤油取ってよ」なんて言われた日には、「自分で取れよ」と悪態をつけて、もう完全に家族に対するそれだ。手を伸ばしても届かない音楽だからこそ、ずっとながつていられる。そして、いつかは完全に離れる日がやってくる。

はじめて野外フェスに出演が決まった時のあの喜び、それは今でも変わらない。出られるまで行かないと意地を張って画面越しに見ていた景色、それを裏側からこの目で見渡した時の感動はすごかった。ずっと求めていたステージの、踏みしめるたびに軋む意外とやわらかい板の感触はいつでも思いだせる。こうやって立ってみると意外と小さい、³ そう思えたこともどこか誇らしかった。選んでくれた主催者の期待に応えたいし、それを超えて、ある意味裏切りたい。心からそう思うし、非日常が日常である幸せをいつまでも手放したくない。

いつからか、花火を見るよりも、花火になることを選んだ。彼がバンドを辞めて、花火になるよりも、花火を見ることを選んでから

もう7年が経った。

いつだってわかりやすく派手な花火が人気を集めるけれど、音だけは均等に誰も裏切らずに鳴る。そんなところが好きだし、そんなところを信じている。⁴ 派手に飛び散る火花が嘘をついても、その火花の音は嘘をつかない。

正直に、埋めきれない悔しくて恥ずかしいところにも届くよう鳴らしていきたい。

まだまだ見せたいものがあるし、まだまだ見ていてくれるだろう。まだ叶っていない夢だってあるんだ。

今年の夏もまた、歓声を合図にしてステージへ向かう。

(尾崎世界観「いつからか、花火を見るよりも、花火になることを選んだ」による。

『泣きたくなるほど嬉しい日々』所収。一部改変)

【語注】

(注1) 野外フェス …… 野外フェスティバルの略。野外の会場で行われる、複数のミュージシャンたちが出演し、演奏する大規模なコンサートのこと。また、それに類するコンサートを単に「フェス」と呼ぶこともある。

(注2) ライブ …… ここではミュージシャンが観客の前で直接演奏を行うこと。

(注3) 華やかなスターメインから地味な蛇玉 …… 「スターメイン」「蛇玉」はそれぞれ花火の種類。

(注4) コールアンドレスポンス …… コンサートのなかでミュージシャンの呼びかけ(＝コール)に対して、観客が応じて歓声などを出す(＝レスポンス)こと。

(注5) TSUTAYA …… CDやDVDの貸し出しを行っているチェーン店。

(注6) MC …… ここでは曲と曲の合間にミュージシャンが話をする事。

(注7) カビキラー …… カビ取り用洗剤の商品名。

問一 二重傍線部 a 「胡散くさい」・b 「辛辣だ」の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

a 「胡散くさい」

ア ありきたりな イ うそつきである ウ 輝かしい エ どころなく怪しい オ なげやりな

b 「辛辣だ」

ア 悪意がある イ 期待がこもっている ウ 正直だ エ 真剣だ オ 手厳しい

問二 傍線部 1 「嬉しかった」とあるが、それはなぜか。七十字以内で説明せよ。

問三 傍線部 2 「ここでいつも迷ってしまう」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 自分たちを応援してくれている観客たちを相手に、最初に投げかける言葉を失敗してしまうと自分たちのことを見限ってしまうのではないかと不安になるから。

イ 期待を込めてミュージシャンに注目する観客たちを相手に、まずはどのような言葉を投げかければ観客がより多くの歓声をあげてくれるのかを考えてしまうから。

ウ ミュージシャンを品定めしようとする観客たちを相手に、これからどのようにパフォーマンスを行えばより多くの人気を獲得することができるのかわからないから。

エ 初めて自分たちの演奏を聞きに来た観客たちを相手に、観客はどのような言葉をかけてほしいのかと考え始めるとどうすることが正解なのが見えなくなるから。

オ まだ盛り上がっていない観客たちを相手に、自分たちの演奏によって盛り上げなければならず、それに失敗するとライブ全体の失敗につながってしまうから。

問四 空欄 X には筆者による造語が入る。どのような言葉が入ると考えられるか。本文の内容に即して十一文字で答えよ。

問五 傍線部 3 「そう思えたこともどこか誇らしかった」とあるが、このときの筆者の心情を七十字以内で説明せよ。

問六 傍線部 4 「派手に飛び散る火花が嘘をついても、その火花の音は嘘をつかない」とあるが、それはどういうことを言おうとしているか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア コンサートのなかでミュージシャンは様々な思惑を持ちながら演奏をしているが、そこで演奏された音楽はミュージシャンの思惑からはずれながら評価をされていくということ。

イ コンサートのなかでミュージシャンは常に演技をしながら観客を楽しませることを求められているが、一人の人間としてはどのような状況にあっても音楽を楽しもうとしているということ。

ウ コンサートのなかでミュージシャンは様々なことを悩んだり自分を偽ったりしながら派手なパフォーマンスを行うことがあるが、そこで演奏された音楽はごまかされずに観客の耳に届くということ。

エ コンサートのなかで観客は盛り上がりがあるふりをしていてもあるが、観客を盛り上げられなかったとしてもそこで演奏された音楽は否定されるべきではないということ。

オ コンサートのなかで観客はただミュージシャンの求めるままに踊らされているだけかもしれないが、コンサートを楽しもうとしている観客の思いは本物だということ。

問七

本文の表現についての説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 波線部A「華やかなスターマインから地味な蛇玉」という表現は、ミュージシャンたちをさまざまな花火にたとえており、コンサートに参加するすべてのミュージシャンたちがそれぞれの個性を發揮して一生懸命に観客の目を楽しませようとしていることが示されている。

イ 波線部B「だから弁当のフタを開けても、ハンバーガーやエビフライを無視して、スミにある漬物に箸を伸ばす」という表現は、コンサート会場の観客の様子を「弁当」にたとえており、盛り上がりがある観客たちばかりでなく、そうではない観客や空席をつい気にしてしまうミュージシャンの思いが示されている。

ウ 波線部C「お通夜でお焼香の列に並ぶ心境とよく似た焦りを感じる」という表現は、「コールアンドレスポンス」を行うミュージシャンを「お焼香の列に並ぶ」通夜の参加者にたとえており、「コールアンドレスポンス」を終えると、もうその観客たちには会えなくなってしまうことにじれったさを感じる心境が示されている。

エ 波線部D「取調室でカツ丼が出てくる前に自白してしまうのは、刑事にも蕎麦屋にもなんだか申し訳ない」という表現は、観客やコンサートスタッフを「刑事」や「蕎麦屋」にたとえており、ミュージシャンとしての本音をこの文章に書いてしまったことへの筆者のお詫びが示されている。

オ 波線部E「音楽と飯を食っている」という表現は、ミュージシャンと音楽の関係性を共に食卓を囲む家族にたとえており、お互いに唯一無二の存在だと感じているとともに、どのようなことがあっても決して精神的には途切れない強い絆で結ばれている様子が示されている。

三

次の文章は、「落窪物語」の一節である。少将は、中納言の北の方（正妻）より長年継子いじめを受けていた女君を救い出し、別邸の二条邸に住ませた。やっと一緒になれた少将は復讐計画を進めていた。これを読んで、あとの問いに答えよ。

少将の君、殿におはしたれば、かの中納言殿の四の君のこと言ふ人出で来て、「物うけたまはる。」¹『かのこと一日も』とのたまへりき。『年返らぬさきにしてむと思ふやうなむある。御文聞こえて』³といみじく責めはべり」と言へば、殿の北の方、²「逆さまにも言ふなるかな。強ひてかういふことを聞きてよかし。人のためにはしたなきやうなり。今まで一人ある見苦し」とのたまへば、少将、^A「さ思はば、はやう取りてよかし。文は今とてやらむ。今やうはことに文通はしせでもしつなり」とぞ、笑みて立ちたまひぬ。⁵わが御方におはして、常に使ひたまふ調度ども、厨子などかしこにやりたまふ。御文、

「今の間いかに。うしろめたうこそ。内裏に参りて、ただ今かへり出ではべり。」

甲 唐衣(注1)きて見ることのうれしさをつつまば袖ぞほころびぬべき
なかなかつつましくなむ、今日の心地は」

「」こには、

乙 憂きことを嘆きしほどに唐衣袖は朽ちにき何につつまむ
と聞こえたまへるを、あはれに思す。^B（中略）

暮るれば、君おはしたり。「かの四の君のことこそ、しかじか言ひつれ。『我』³と言ひて、人求めてあはせむ」とのたまへば、女君、「いとけしからず。いなと思さば、⁴おいらかにこそけしきばめ。本意なく、いかにいみじと思へばなり」^Cとのたまふ。少将、「かの北の方に、いかでねたき目見せむと思へばなり」とのたまへば、女君、⁵「これはや忘れたまひぬ。かの君や憎かりし」とのたまへば、少将、「いと心弱くおはしけり。人の憎きふし思し置くまじかりけり」と⁶「いと心安く」とのたまひて、臥したまひぬ。

【語注】

- (注1) 殿 …… 本邸。
- (注2) 四の君 …… 中納言殿の北の方の実の娘である四女。
- (注3) 御文 …… 普通、平安朝では、男のほうから手紙を何度か贈り、女が承諾の返事を出して結婚する。

(注4) 殿の北の方 … 父大将の北の方で、少将の母。

(注5) わが御方 … 少将の部屋。

(注6) かしこ … 別邸の二条邸。

(注7) 唐衣 … 衣の珍しく美しいのをほめて言う言葉。

問一 傍線部A「のたまへ」・B「聞こえたまへ」・C「思へ」の主体(主語)は誰か。最も適当なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア 少将の君 イ 女君 ウ 殿の北の方 エ 中納言殿 オ 中納言殿の北の方

問二 傍線部1「かのこと一日も」・4「いなと思さば、おいらかにこそけしきばめ。」の現代語訳として最も適当なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

1 「かのこと一日も」

ア あのご結婚のことを一日も早く決めたい。

イ あの女君のことは一日たりとも忘れまい。

ウ あの四の君の結婚相手に一度会ってほしい。

エ あのいじめのことは一日も早く忘れてほしい。

オ あの連れ出したことを早くわびるべきだ。

4 「いなと思さば、おいらかにこそけしきばめ。」

ア 結婚相手がいらないと思えば、のんびりと機会をお待ちください。

イ 北の方が憎いと思えば、はっきりと本人におっしゃるのがよい。

ウ あなたが嫌だと思えば、穏やかに態度にお示しなさい。

エ 代わりの者がいないと思えば、広くお求めになってください。

オ 私との結婚が無理だと思えば、素直に求婚をお受けください。

問三 傍線部2「逆さまにも言ふなるかな」について、どういうことが逆さまなのか。二十字以内で説明せよ。

問四 和歌甲・乙とはどういう気持ちで詠んだものか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 甲は、女君と会えるうれし涙が二人の関係のほころびにつながることを心配する少将の気持ちを詠んだもので、乙は、不吉な涙で二人の関係が終わる運命を受け入れる女君の気持ちを詠んだものである。

イ 甲は、以前と違い美しい着物を着ることができてうれしい女君の気持ちを素直に詠んだもので、乙は、辛い気持ちを我慢せず遠慮なく打ち明けてほしいと気遣う少将の気持ちを詠んだものである。

ウ 甲は、堂々と女君と会えることは涙が出るほどうれしい少将の気持ちを詠んだもので、乙は、これまで常に待たされていた身としては辛さしかないという女君の気持ちを詠んだものである。

エ 甲は、今が幸せすぎてこの先二人の仲が気まづくなることを心配する女君の気持ちを詠んだもので、乙は、不吉な心配ばかりしていると本当にそうなることしなめる少将の気持ちを詠んだものである。

オ 甲は、美しい女君と逢えることがうれしくて仕方がない少将の気持ちを詠んだもので、乙は、これまでが辛くて悲しすぎたためまだうれしいと実感できない女君の気持ちを詠んだものである。

問五 傍線部3「『我』と言ひて、人求めてあはせむ」とはどういうことか。二十五字以内で説明せよ。

問六 傍線部5「これはや忘れたまひね。」は「そのような考えはお忘れください。」という意味である。少将は何を考えているのか。十五字以内で答えよ。

問七 傍線部6「いと心安く」について、なぜ少将はそう思ったのか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 嫌なことを長く引きずらない女君の気の弱さは妻として理想的だと感じたから。

イ 少将が乗り気でない仕返しを強く催促しない女君のつつましさで感動したから。

ウ 辛かった過去のことを忘れて新たな生活へ向かう女君のたくましさで感心したから。

エ 別の妻との結婚に抵抗しつつも少将を気遣う女君のやさしさがうれしかったから。

オ 少将の残酷な面を見てもそれを愛情と受け止める女君の心の広さを感じたから。

